

『休息』

ケルマディクは、かつて王国都市として『天使王国』より自治都市の特権を認められた魔術研究都市だった。穏やかなサルス川が中央を流れ、中洲にテッラムリア最大級の魔術学院マーガが鎮座し、その左右川岸に交易商人の市場や、武器、鎧、その他の道具を作る工房が広がる、いわば魔法産業都市だ。

『天使王国』の庇護がないも同然になっても、ケルマディクは独立を保持した。

魔術学院の力と、交易商人達の人脈、関係諸侯の思惑が複雑に絡み合い、ケルマディクは、その支配領域の矮小さから見れば不釣り合いなほど強力な独立を保っていた。

フードとマントで身を隠したポルメリアがたどり着いたのは、そういう街だった。

とはいえ、彼女はここで一暴れするつもりはなかった。ケルマディクは彼女が判断するにはあまりにも複雑だ。

工房の親方達のギルド、商人たちのギルド、魔術師たちのギルド、神々の神官たち、それぞれが代表を送り運営している評議会が、この街の頭脳だ。

街の支配については『善政』と言えた。日々の暮らしに不安不満はあれども、誰かが虐げられたり、不法な収奪にあつたりという事はない。少なくともポルメリアの耳に入った事はない。

評議会はただ一点で全会一致をみていた。すなわち、ケルマディクの完全自主独立である。

その為には色々と後ろぐらい陰謀にも手を染めているという噂である。

だが、それで苦しんだ人々の悲鳴がポルメリアの耳に入らない限り、彼女が評議会議場に殴りこむ事はありえなかった。

彼女が尋ねたのは裏道の、建物の半地下にある小さな工房だ。

白や黒や桜色の大理石で飾られた表通りではなく、砂岩で建てられた町並みにある小さな工房など、誰の目にも止まらない。だが彼女は迷う事なく扉をノックし、返事も聞かずに中へ入った。

「無礼な奴は帰れ」

手厳しいだみ声が薄暗い部屋の奥から聞こえる。部屋の中はやや蒸し暑い。奥にある炉を使って仕事をしているのだろうか？しかし鎚の音は聞こえない。

「また世話になりにきた、アルベルバル」

冷たい少女の声を聞いて、奥から人影が現れた。背は小柄なポルメリアよりやや低い。

しかし横は頑丈で、ほっそりとした彼女の倍はあるのではないだろうか。

黒よりも白いものが多い髪は豊かで、腰の前掛けよりも下に下がっている。頭は前から天辺が禿げている。別段それを恥じた様子もなく、工房の主は仏頂面をポルメリアに向けた。それは年を経たドワーフだった。

「なんだ、『城砦落とし』か。今回は早いな。一月振りか？何かぶっこわしたのか」

「いや、盾と剣を鍛えてもらいたい。金は用意できた」

フードとマントを彼女がはずす。途端にこの半地下の工房が光で溢れる。比喩ではない。

天使の眷属である彼女は、微かに発光し魔法の力が働いていると主張している。

もちろん旅の汚れが目立つが、彼女の輝くような一本三つ編みの金髪も、優しく淡い乳白色の肌も、可憐な容姿も、絶世の美女に相応しいものだ。

しかしアルベルバルは知っている。その清冽な藍色の瞳も、珊瑚色の唇も決して微笑む事はないのだと。

彼女は背中の魔法のザックから浮遊盾を取り出し、同じように背負っている大剣を鞘から抜く。二つとも無数の傷がついているがよく手入れされている。剣と盾をつくったのはアルベルバルだ。いや、ポルメリアが持っている魔法の品の大半は彼が作ったものだ。強面の彼だが、自分の作った道具が大切に扱われていると知ると、顔が自然に綻ぶ。

だがポルメリアはにこりともしない。そのまま幾つかの宝石を取り出す。一粒で農村全員が十年は食っていけるだけの穀物が買える、大変な価値の石だ。それを無造作に出している。それだけを見て、彼女がまた容易ならざる注文をしてくる事を知り、アルベルバルは密かに溜め息をついた。

「今度はどうするんだ」

「盾は精神感應をよりダイレクトに伝えて欲しい。少し動きが鈍いようだ。それから剣には属性をつけてくれ」
アルベルバルは彼女の言葉は引き取った。

『『善』のか』

彼女はそうだとも言わなかった。それ以外に何があるというのだ？彼女の態度はそう言っていた。

「やれやれ。ガキが『悪』殺しに血道をあげおつて。噂は聞いているぞ。今回の旅で四つ城や塔を落としたそうだな」

「四つの城、塔は一つだ」

誇るでもなく、不機嫌になるでもなく、彼女は淡々と訂正して工房の中を見回す。相変わらず物が少ない、殺風景な部屋だ。しかしそれはアルベルバルの腕が悪い事を意味するのではなかった。

むしろ逆で、さばき切れない客から逃れる為に、裏道の目立たない場所に工房を構えているのだとも言える。それでも作った端から買い手がつく。だからここにはいつも物が無い。

作りかけの半端物をこれ見よがしに飾るつもりもアルベルバルにはなかった。

何も無い部屋でも椅子ぐらいはある。アルベルバルは溜め息一つついて座った。

「前から聞きたかったんだが、そんなに殺してどうする。名前を上げたいって訳じゃないよな。

ランキン侯爵のお姫様なら名前を隠した方がいくらいだ。腕を磨くって訳でもない。お前の腕なら龍たつて殺せそうだな。金という訳でもないんだろ？こんなに金払いのいい客は滅多にないからな。・・・本気で『悪』を滅ぼすと、そう考えているのか？」

彼女は彼の質問にすぐには答えなかった。ただ、目立たぬように立てかけてあった剣を目敏く見つけて手に取る。

彼女自前の大剣に比べれば威圧的ではない普通の長剣だ。鞘から抜けば淡い光を持つ。弱い魔法がかかっているのだろう。

「これ、貸してくれるか？手元に武器がないのは、いかにも心細い」

「武器がないと命が幾つあっても足りない。そういう事だろう。『善』の戦士を気取る奴に多いんだ。自分は正しい事をしている。『悪』は滅ぼすべきだ。だから、どんなに殺しても自分は悪くないってな。だが現実には、殺した分だけ狙われる。名が売れば一旗組みに、懸賞金がかかれば賞金稼ぎに、そして殺した相手の身内に復讐される。

お前みたいな小娘が、そこまで背負い込む事はないと、俺は思うがね」

振り返ったポルメリアの清冽な藍色の瞳が、灰色のアルベルバルの瞳を見詰める。

普通の者ならば威圧され尻込みしてしまう視線の鋭さ。しかしアルベルバルは鍛冶師であると同時に高位の魔術師でもある。幾多の修羅場を潜った戦士でもあった。幾ら城をたった一人で陥落させる凄腕の騎士であろうと、自分の二十分の一以下の年齢の少女に怯む事はなかった。

「善なる軍神は私に、『悪』との戦いに参加せよ、とおっしゃった。人々を苦しめる者たちを滅ぼす事以外に、私に何ができる？」

反対に問われてアルベルバルはすぐに答えられなかった。

彼とてもドワーフが主神と仰ぐ善なる鍛冶の神に朝や眠りの祈りを捧げ、鍛冶仕事の際には供物を捧げる。

自分の言葉が、ただ単に年端もいかぬいたいけなポルメリアの、張り詰めた姿を見ていられないから出てくるのだという事も解っている。だが、それはアルベルバルの感傷だ。

ポルメリア・ランキンは生まれた時から善なる軍神に捧げられた。物心ついてからずっと剣ばかり握っている。覚えた事と言えば、敵を殺す事と生き残る事しかない。他に生きる道知らない彼女に、何をしろというのか。

「確かに僕にはお前の生き方をどうこう言う権利はないかもしれん。だが一人で何もかも背負うのはやめろ。お前みたいな子供が命をかけて、たった一人で殺し合うのは、痛々しいからな」

「この間、私は自分の師匠に会った」

突然、ポルメリアは話題を変えた。長い眉毛を片方あげて、アルベルバルは怪訝そうな顔をする。

「一城の主になっていた」

「それはそれは・・・」

「だが、人々を搾取する暴君になっていた」

アルベルバルは沈黙した。寿命が長く意志の強いドワーフは、滅多な事で自分の信条や生き方を変えない。だが人間という短い命を気ぜわしく生きていく生き物は、善にも悪にも染まりやすい。

彼は溜め息をついた。

「殺したのか」

ポルメリアは答えなかった。沈黙が肯定の印だった。アルベルバルは首を振った。

「信じるものがなくなったら・・・」

小声のポルメリアの咬きを耳にしてアルベルバルは改めて彼女の顔を見た。それは苦いものを嘔み潰したような、穏やかだが苦しい微笑みだった。

「信じるものがなくなったのなら、強くなるしかない」

アルベルバルは彼女の盾と剣を手を取った。今の彼女に何を言っても無駄だ。彼ができる事は、ただ彼女の手に合うように剣と盾を鍛えてやるだけだった。

「どれぐらいで仕上がる？」

「十日だな」

彼女の問いに彼はぶっきらぼうに答えた。

「では、十日後にまたくる。剣は貸してもらおうぞ」

「ああ、サービスしておいやるよ」

「ありがとう」

彼女が去ると工房はまた薄闇に包まれた。それは清冽なる一陣の風だった。

アルベルバルにとってポルメリアはそういう存在だった。しかし、だからこそ思う。生きて、生き続けて欲しいと。

「まったく、神託なんぞに縛られやがって。馬鹿正直に戦う事しかないからな。馬鹿は早死にするっていうのによ」

それは彼女を恐れ侮蔑する者たちと同じ言葉だった。だが同時に搾り出された溜め息が、違う感情を表していた。愚直だからこそ幸せになって欲しい。

しかしそれは、アルベルバルの都合のいい願望でしかなかった。

アルベルバルの工房を出たポルメリアの足は、しかし宿屋街には向かなかった。

方角から言えば反対、サルス川河畔に沿って外周方向へ向かう。

河畔にはサルス川を遡り、下ったりして運ばれてくる船荷の倉庫が並んでいる。その一角が彼女の目的地だった。

ケルマディク万神殿。善の属性を持つ神々ほとんど全てを祀っているこの地方最大級の神殿だ。

それゆえに参拝者や巡礼者、供物を捧げにやってくる者が数限りない。当然、神々の結界も強力に張り巡らされている。悪意を持つ者がおいそれと入り込む事はできない。

この巨大伽藍の一角に豊饒の女神や竈の女神を祀った神殿がある。同時に孤児院でもある。

災害、戦、疫病・・・人々が死ぬ理由はそれぞれ数え切れない。子をなくした親も、親をなくした子も数多くいる。他にも許されぬ愛の末にできた子供や、望まれずに生まれた子もいる。

世界は子供だけで生きていくには厳しすぎる。大きな街の大きな神殿には、例外なく孤児院があった。

ポルメリアが主神殿で他の参拝者たちとともに神々に挨拶した後、向かった先はそこだった。

アルベルバルの工房に仕事を頼み、ケルマディクに長期滞在する時は必ずここで宿をとる。

この三年間、それは変わらない事だった。

「まあ、ポルメリアさま。お帰りなさいまし」

迎えてくれるのは竈の女神の祭祀官長である巫女だ。竈は家の守り神である。同時に家事を取り仕切る主婦の守り神だ。祭祀を司るのは既婚の女と決まっていた。どこの街でも孤児を預かるのは竈の女神を祀る神殿だ。

恰幅のいい中年の祭祀官長も、何処かの大店の女将だ。慈善事業という事で竈の女神の祭祀と孤児院の運営を任されている。

「・・・ただいま、戻りました」

やや緊張し恥らいながらポルメリアは祭祀官長に挨拶する。三度ここに滞在したのなら、もう客ではない。

貴女はこの家族なのだと祭祀官長は言い張った。

それ以来この豊饒の女神や竈の女神に仕えるものは、ポルメリアの来訪を『いらっしやいませ』ではなく『お帰りなさい』といい、出発を『いってらっしやい』と送り出すのだ。

家族というものにほとんど接した事のないポルメリアにとって、それは戸惑い、気恥ずかしく、何だかくすぐったい事であったのだが、今では何とか受け入れている。

「また十日ほど、ご厄介になりたいのですが・・・」

「何をおっしゃいます！ポルメリアさまは私どもの家族同然。ごゆっくりなさいます。子供たちも喜びますよ。ああ、お湯をお使いになりますね。すぐに用意しますから」

「その前に井戸を使わせていただけませんか？」

「いいですとも。その間に湯を沸かしておきますから」

礼を言つてポルメリアは勝手知つたる井戸へと向かった。その汚れて疲れきつた後ろ姿を見ながら、祭祀官長は溜め息をつく。

彼女がポルメリアを歓迎するのは、慈善奉仕の為だけではない。ポルメリアは毎回訪れる度に多額の寄付をくれる。

正直それは大変助かるものだ。竈の女神の祭祀を司るのは、大概貴族や裕福な商人の妻であり、彼女らの気心が知れた使用人の女たちである。むろん無報酬だ。

だが日々のお祈り、折々の祭り、そして何よりも孤児院の維持に、お金はいくらでも必要だ。

だからケルマデイク市民でもないポルメリアがいくらかまとまった額の寄付をくれるというのは、本当にありがたいことだった。しかしいくら商人の妻とはいえ、それだけでポルメリアの事を歓迎している訳ではない。

彼女は、ここでは決して自分の運命を喋りはしなかった。

噂で聞く悪代官や強盗団、非道な魔法使い殺しの手柄話を孤児院の子供達に話した事もない。

だが皆薄々感づいていた。彼女が自分に課せられたために倦み疲れ、絶望している事に。

ここでの彼女は、そんな殺伐とした日常を忘れる為にいるのだ。

ならば祭祀官たちにできる事は、なるべく彼女に穏やかで平穏な日々が送れるように、せめてこの神殿に滞在している間だけでも、そのような日々が送れるようにしてあげるだけなのだ。

祭祀官長は平凡な女だった。夫は目端の効く商人だが、彼女といえれば人付き合いがよく、世話好きな女というだけに過ぎない。

だから今回も無事にポルメリアが『戻ってきた』事に安堵するばかりなのだ。

この十日間余りの間、彼女にとって心安らかな日々でありますように、そう願うばかりだった。

井戸端についた彼女はフードとマントを脱ぎ、サーコートを脱ぐ。その下の重装鎧を外す。

鎧はドワーフの銀と呼ばれるミスラル製だ。軽くて丈夫でありしなやかである。

魔法がかかつていなくても、何も鎧をつけていない状態と同じように疾走できる。

命を預ける大切な鎧を細部に渡って点検する。そして整頓して魔法のザックに入れる。

次は剣だ。愛用の大剣はアルバルの元にあるが彼から借りた長剣がある。

ポルメリアの歳より十倍以上の年月を鍛冶屋で過ごしてきた彼に不手際などある筈もなかったが、これも武器にその身を預ける騎士の習いだ。全てを自分の目で点検し、握りを確かめ、重さを確認しながら幾つかの型を構える。

どうやら問題ないと思つたのは随分たつてからだった。

次に洗濯だ。たらいと洗濯板を借りて、たまった洗濯物を洗う。

自分が着ている物も洗うので、用意してある新品に着替えなければならない。ここで当たり前少女の様子を周りを見回す。人影が見えない事を確認して、素早く着替えてしまう。一瞬の早業だった。

これは男が圧倒的に多かったランキン侯爵騎士団に属していた頃に身につけた特技だった。これのおかげで少女の一人旅もいくらか楽になった。

その間に湯が運ばれてくる。熱湯といってもいぐらいの熱さのお湯を女性祭祀官が二人がかりで運んでくれた。いずれも良家の夫人や令嬢といったところだろうか。

歳はポルメリアよりも上なのだろうが、しかし既に吟遊詩人に歌われる彼女を好奇心で見詰めながら運んでくる。

「ありがとうございます・・・なにか？」

はつきり言ってポルメリアにとって侮蔑と恐怖と敵意こそがお馴染みの感情だった。

好奇心や憧れなど慣れない感情はよく解らない。

お湯を置いた後、小柄なポルメリアの姿をやや緊張気味に見ていた祭祀官たちは、彼女に問い掛けられて、慌ててその場から去っていった。

熱湯をたらいにいくらか注ぎ、ポルメリアは祭祀官たちの好奇心な眼差しを気にせずに洗濯を続ける。

人の相手をするよりも、まず洗濯する事が先だった。これを怠ると、汗がついた着物をまたも身にまとわなければならない。それは女としては許せない事だった。

井戸端に生えている樹木に紐をかけ、洗濯物を干していく。川風に吹かれて衣服がはためく。次は彼女自身の番だ。

熱湯に水を足し浸したタオルを固く絞って顔を拭き、手足を拭う。

少し考えてから金髪の三つ編みを解き、水でぬるめたお湯を長い髪にかけた。それから櫛で丹念に梳いていく。宿に泊まる時は髪のスラッシングを欠かさない。しかしお湯で洗うのと櫛でただ梳くのとは訳が違う。

一櫛一櫛入れるごとに旅の疲れと穢れが落ちていくようだ。

念入りに髪を梳いてしまった後、やや思い切つて上着を脱いだ。

上半身を丹念に拭い、そして、やっぱり思い切つて全部脱いでしまった。

たらいに移した熱湯は水を入れて調度いい湯加減である。

誰かに見られる恐れもあったが、全身をお湯に浸す誘惑にはかなわなかった。

たらいに身を沈め、心地よい湯の熱さを楽しむ。

それがやりたければ公衆浴場に行けばいいのだが、人の出入りする場所で無防備になる事に抵抗があった。

人目が多ければ襲撃者も迂闊に手を出せない、という発想は彼女にはなかった。その点、彼女はまだ子供だった。そして、やはり愚直だった。

とはいえ、野外で裸体をさらすと言うのはいい事ではない。夢心地であったがポルメリアはさっさとお湯から出た。素早く乾いた布で体を拭き、瞬く間に衣服を身につけてしまうと、もう後始末に入っていた。

使ったお湯を捨て、井戸の水を汲み、たらいを洗う。借り物である。念入りに洗う。

それを立てかけ、洗いたての布をはたくと、ようやくポルメリアは一息ついた。これで旅の垢は落とせたというものだ。

借り物の長剣を抱き、彼女は木陰で横たわった。長旅の疲れを癒す昼寝をしようというのだ。

しかし目を閉じて彼女の臉に浮かぶものは、今回の旅で彼女の眼前で命を落とした人々の姿だった。

それは城や塔の支配者たちだった。村々に圧政をしき人々から財を絞り尽くす事しか考えなかった悪しき支配者たち。だがその死に際の姿で、彼らはこう叫ぶ。

「俺達は本当に死に値したのか」

ある者は言う。自分が支配した土地は貧しい。とてもではないが他の諸侯からの侵略に耐えられそうもない。外敵から領民を守る為の重税だ。仕方なかったのだ！

また、ある者はいう。人生を楽しんで何が悪いというのだ。酒を飲み、旨いものを食べ、女を愛する。

美しい女を愛し、その女が欲しがる宝石や装飾品を得る為に金が欲しかった。

領民の為の骨折りはちゃんとしているのだ。その上で贅沢をして何が悪い！

そしてかつての師匠、グラムス・ランズベールが言う。

解るまい、貴族の血を引いて生まれた者には。解るまい、成功が約束された者に、それが得られぬ者の苦悩など。解るまい、己が教え子に見下される者の辛さなど！

ランズベールの怒りが消えていく時、その後には汚い灰色の髪を乱れたままにしている小男の姿があった。塔で彼女が一撃の下に殴り殺した魔法使いの、下卑た姿だった。

さぞかし満足だろう。幼子を実験台にして魔法の開発に勤しんでいた儂を殺す事ができて。いや爽快だったに違いないさ。

何せ儂のつくっていた呪文は人々を死に至らしめるものばかりだった。『善』に仕える貴様なら、いい事をしたとご満悦だろうよ。

しかしな、命を使って魔法を極めようとした儂と助けるべき命を見殺した貴様と、何が違うというのだ。

貴様は儂の塔から一人でも助ける事ができたか？誰一人助ける事はできなかった！そうだろう？

牢から出してくれとせがんだ姉妹を貴様は出さなかった。儂を倒す事を優先させたんだろう。だが結果はどうだ！

はっ！大したものだよ、善の使徒というものは。いやはや、いい気なものだな！

魔法使いの高笑いが闇の中へと消えていく。その向こうから小さな白い影が浮かび上がってきた。

それは助けると約束した自分と同じ年頃の姉妹だった。灰色の髪をした幼い姉妹が二人、お互いに寄り添いながら泣いている。

「嘘つきー」

妹が叫んだ言葉がポルメリアの心に突き刺さった。姉が泣き顔を上げた。白い顔に赤い涙の跡が見える。

「私達を助けるといったじゃない。それなのにどうしてきてくれなかったの？牢の中は煙で一杯になったわ。

私達は涙が止まらなかった。そのうち妹は咳をし始めて、私も苦しくなった。

でも貴女は来てくれなかった！私達が苦しんでいるのに、貴女は何もしてくれなかった！」

「嘘つきー」

甲高い声がポルメリアを責めたてる。

「いいえ、違うわ。貴女は人助けの美名の下に戦う事を生き甲斐にしているだけなのよ。

私達が苦しんでいる間、貴女は一体何をしていたの？鋼鉄の木偶人形と殴り合いをしていただけじゃない。

そうなのよ。貴女はただ戦っていれば満足なのよ！」

「人殺し！」

「何が善の眷属だ！」

『善』も『悪』もどんな違いがあるというのだ？」

「戦いだけが、あなたの楽しみなんだ」

「人を殺し続けて、その果てに何が得られるというのだ？」

最後の問いはランズベールが発した。それまで彼女はあらゆる罵詈雑言を黙って受け止めていた。どれも反論する事さえできない、当然の事だと彼女は感じていた。

だが、最後のランズベールの問いかけに、彼女自身が不意をつかれたように顔を上げた。

そうだ。私は戦い続ける。それが宿命であるのだから甘んじて受けよう。

だがその果てにある者は一体なんだ？戦いには果てがない。

無数の多次元世界を舞台に『善』も『悪』もいちごっこのような陣取り合戦を繰り返しているだろう。

どちらにも決定的な勝利を得る事はできない。善なる軍神は私のようなものにまで手を差し伸べ、戦いに参加するよう命じた。それは主戦力である『天使』たちを差し向ける事ができない、善なる神々の苦肉の策なのではないか？

所詮、私は単なる捨て駒なのではないか？命果てるまで戦い続けて、そして勝利を得られるのか？

私の戦いに意味があるというのか？

本当に？

深い苦悩と疑問が頭の中を巡る。いつしか彼女を責める者たちの声さえ届かなくなる。暗闇の中、彼女は一人立ち続ける。自らが発する仄かな光のみが、彼女の存在の証だった。

孤独。それが彼女だった。

誰にも解らない。誰一人知らない。たった一人で戦う孤独。酷く寒さを感じる。心のどこかに隙間風が吹きすさぶ。

「そうだ、それがあなたの人生なんだ。誰にも顧みられず、山ほど人を殺して、自己満足に浸る。上等な一生だよな。ええ？それならいつそ、俺の明日の糧の為に殺されてくれた方がマシじゃないのか？少なくとも、あなたは俺を殺さずに生かす事ができたんだぜ。なあ？」

声の主は若いエルフだった。旅の途中で強力な毒つきの矢で自分を狙った、賞金稼ぎのエルフ。

彼はポルメリアにえぐられた喉をパクパク動かしながら、陽気な調子でそんな事を言った。

これが私の人生。これが私の定め。幾多の命を奪いながら孤独に生きる事を宿命付けられた、

これが神々に授けられた私の運命。背負った命はアルバルの言葉通り重く彼女の肩にのしかかる。絶望的な気持ち。

その壮絶な閉塞感と孤独に負けそうになった時、彼女はかすかな声を聞いた。

「ポリー」

それはか弱くもあどけない声だった。一体それが何なのか。彼女はそれを思い出せなかった。しかし今はそれにすぎる他ない。明らかに幼い子供の、頼りない声であるにも関わらず、無心に自分に呼びかける声に答えてポルメリアは走った。

その声だけが自分を必要としてくれる。それだけが、自分がこの世に存在する証。そんな風に思えて、藁にすぎる思いで手を伸ばす。

「ポリーー！」

その叫び声でポルメリアは、うたた寝から目を覚ました。全身に不快な汗をかいている。

視界には自分を覗き込んでいる顔が並んでいる。

そばかすの散った顔。日に焼けた顔。泥に汚れた顔。鼻水が垂れている顔。顔、顔、顔、顔……

どれもこれも十歳より上という事はなかった。誰も彼も無邪気というしかない顔だった。

それは竈の女神が預かる孤児たちだった。

「あつ、やっと目が覚めたよ」

「ポリーー、お帰り！」

「ねえ、遊ぼうよ。早く遊ばないと、ポリーー、またいつちゃうでしょ。遊ぼうよ！」

「剣の稽古をつけてくれる約束だよ！」

「違うよ。宝物を見つけにくって言った」

「お前の宝なんて、くっだらねー」

「ねえねえ、お人形遊びしてくれる約束だよね？」

「そんな遊びなんて、しねーよ」

「あなたたちに付き合っていたらポリーーも疲れちゃうわよ。それよりも、花を摘みに行きましょう。ね？」

十数人いる大小男女さまざまな子供たちが好き勝手にポルメリアの気を引こうと言い争っている。

ポルメリアはしばらくその喧騒に、呆気に取られたような顔をした。

自分を口々に責め立てる人々の群れ。あれは夢だったのか。そして今、口々に自分を誘おうとする子供達の群れ。これが現実なのか。

子供達の言い争い。ポルメリアの気を引こうと様々な計画が飛び交い、そして幼い体一杯に一生懸命に主張する。

何時の間にかポルメリアの口はほころび、そして何ヶ月も出していなかった軽やかな笑い声が響き渡った。

その声にびつくりしたように子供たちは静かになる。だがそれも一瞬の事だ。

誰もが安心したように、ようやくポリーーが笑ったと喜び騒いでいた。

ポルメリアは子供が好きだった。少なくとも幼い子供達は悪意を持たない。この年頃にあるのは悪戯心だ。それは神々も苦笑して許す無邪気な行爲だった。

いや、本当のところはそれさえもどうでも良かった。

理屈ぬきで彼女は自分よりも幼いもの、か弱い者の面倒を見るのが好きだったのだ。

立ち上がった彼女は腰の帯に長剣を差し、お尻についた草をはらった。不愉快な汗は、いつしかひいていた。

「解った、解ったから！じゃあ、土手を越えて川原まで競争しよう。そこで花を摘んで、宝物を探して、それからえーっと……」

「剣の稽古！」

「そうね。少しだけならみてあげるわ」

比較的歳が上の男の子たちは、名高い騎士であるポルメリアに相手をしてもらえるとあつて大喜びである。だが小さな女の子たちは違った。人形遊びをねだった彼女達は、皆泣きそうな顔をしている。

「お人形……」

そんな女の子たちの為にポルメリアは目線までしゃがんだ。

「お人形に差しあげる花をさがそ。川原の石で部屋もつくつてあげよう。ね？」

それを聞いてようやく女の子たちも納得したようだ。手にした粗末な人形を大切に握り締め、そして片方の手でポルメリアの乳白色の手を握り締める。

それは命の暖かさだった。昨日まで彼女が奪い続けた命の温もりだ。

「ポリー！行くよー」

もう男の子たちは走り出している。年嵩の女の子たちも後に続いた。

幼い男の子たちがその後を追いつ、ポルメリアは小さな女の子たちを率いて川原に向かった。

彼女の名前はポルメリア・ランキン。

またの名を『城砦落とし』。

しかし今は、今だけは、子供達のポリー。

無垢な笑顔に囲まれて、自分が生きている価値を噛みしめながら。